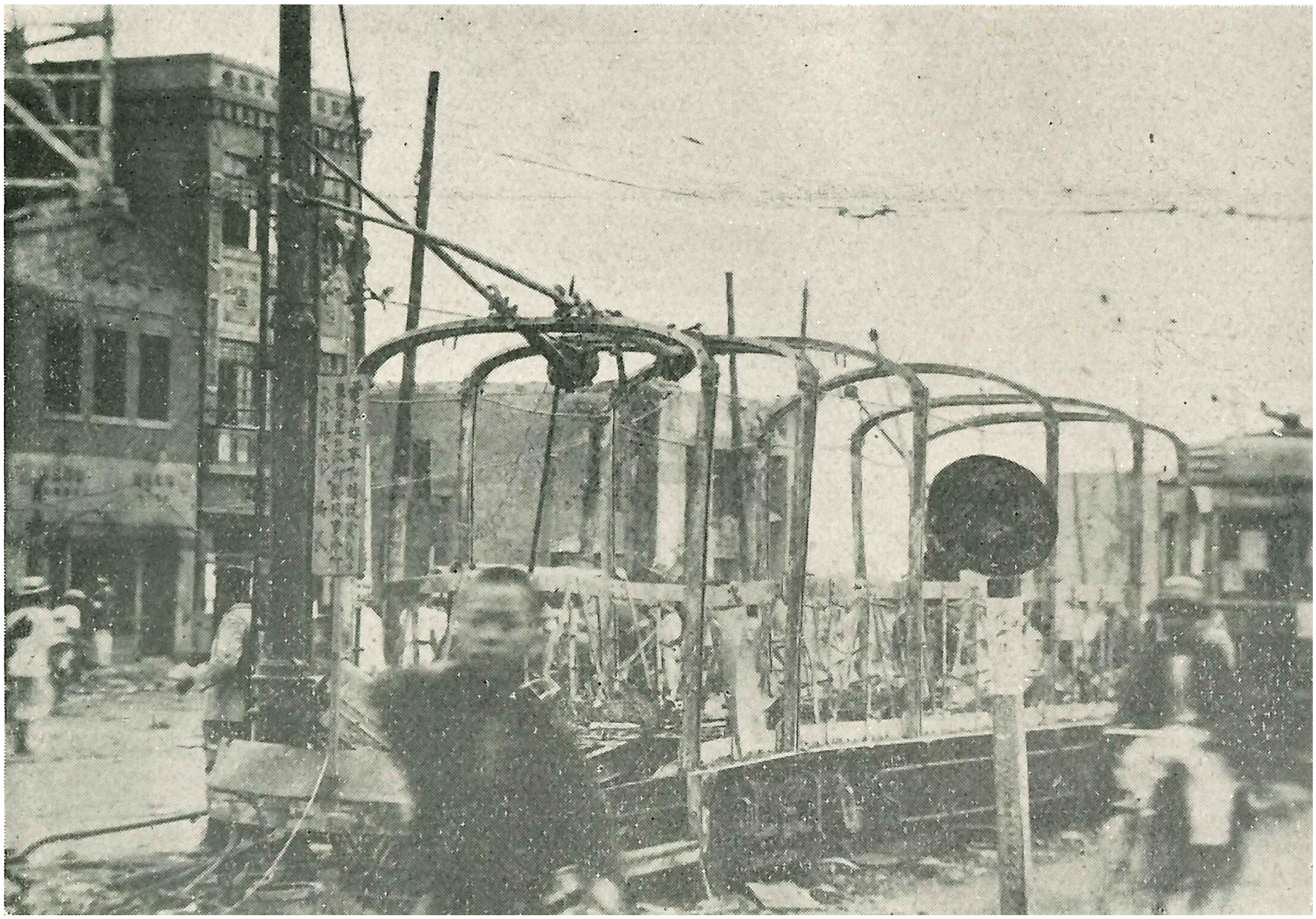

焼失した市電車両の残骸（『東京市電気局震災誌』1925 年）

東京市街地の交通を支えていた路面電車は、明治 44 年（1911）に東京市によって買収され、東京市電が市民の足となっていました。大正 11 年（1922）には利用者が約 131 万４千人を数え、市電の黄金期を迎えていました。

そんな中で発生した関東大震災では、まず一切の送電が停止し、運転中の車両は線路上に立ち往生することになりました。このため、近隣の火災になすすべなく巻き込まれ、工場内での焼失と合わせて、当時保有されていた 1,905 両の車両の内 779 両が焼失しました。架線や支持鉄柱の損傷、レールの沈下、橋梁の落下など被害は多岐にわたり、壊滅的な被害が生じたのです。